

移情閣（孫文記念館）友の会 2012年5月20日開催公開文化講座

「新移情閣秘話ーコンクリート・ブロックに賭けた夢ー」

兵庫県尼崎21世紀プロジェクト推進室長 塚原 淳 氏

《移情閣はコンクリート・ブロック造》

今日の題なんですけど、最初、「…に託した夢」としていたのですが、「新移情閣秘話ーコンクリート・ブロックに賭けた夢ー」に変更させていただきました。

「移情閣秘話」といいますのは、移情閣を復原した頃、友の会の会報紙上で、3回にわたり執筆させていただきました。その時は、この建物のいわれですとか、金唐紙等についてご説明させていただきました。



移情閣はなんで凄いか、そして、なんで国指定重要文化財なのか、その一番重要なポイントがコンクリート・ブロックです。今日は、このコンクリート・ブロックをテーマにお話しさせていただきますと思います。移情閣のコンクリート・ブロック誕生に関して、なかなか真相がわからなかったのです。いろんな調査を経てようやく解明できましたので、論文にまとめた次第です(塚原淳、足立裕司「木骨コンクリート・ブロック造とその成立過程に関する研究ー移情閣と東亜セメントの事例を通じてー」日本建築学会計画系論文集第74巻第637号、2009年3月)。結構、ドラマチックな話もありまして、「呉錦堂さん、さすがだなあ」という思いを新たにしましたところ



これが松海別荘ですね。こちらが今日の会場となっている付属棟です。呉錦堂の別邸として一番最初に、明治20年代後半に建てられたものです。付属棟の横に、これは、移情閣と同じコンクリート・ブロック

造で西洋館を造りました。写真ではわかりにくいのですが、バロック調の屋根を持った建物、県の公館がございますが、公館のような屋根を持った2階建のかなり大きな建物だったのです。

この写真にはないのですが、移情閣はこの横に増築された建物です。この写真は、明治44年から大正3年ぐらい迄の間に撮られたものだと思います。実は、松海別荘の外観がわかる写真はこの一点だけです。もう、お亡くなりになりましたが、東天閣の元総支配人、久保さんの絵はがきです。この絵はがきから、漸く実態がわかったという大変貴重な資料です。



移情閣は、皆さんご存知のとおり、呉錦堂の別邸です。明治44年頃建てられた松海別荘の南東に、大正4年に上棟された搭屋で、迎賓用の西洋館です。何のために建てられたか、諸説がありますが、一般には、呉錦堂が還暦を記念して建てたと言われていています。もう一つは、これは、中村哲夫先生がおっしゃっていたんですが、一階の天井中央に龍の飾りがありますね。それは、龍神、リ

バイアサン（水神さま）だと…。もともと海運で財をなした呉錦堂は、移情閣に航海の安全を託したのではないかと。

では実際、構造的にはどんな建物なのか。2階への階段の途中にある階段室に入るとよくわかります。木骨コンクリート・ブロック造3階建ての建物です。木骨というのは、講演会場のこの建物、付属棟は木骨煉瓦造です。通常言う在来工法の、木造とおなじように柱梁構造を作って、その外壁をレンガが一般的なんですが、移情閣はコンクリート・ブロックを使って建てた非常にめずらしい建物です。今は、3階建はできません、絶滅種です。そして、現存するわが国最初期のコンクリート・ブロック造の建物です。後で紹介しますが、ライバルはいます。けれども、最も早い段階のコンクリート・ブロック造の建物です。呉錦堂が作った東亜セメント製のコンクリート・ブロックを使っています。間違いなく国産技術による建物です。そして神戸市内で、金唐紙が残っているのはここしかありません。豪華な内装を持つ神戸屈指の西洋館なのです。

### 《東亜セメント株式会社の設立》

東亜セメント、これは呉錦堂が設立したセメント会社です。設立は明治40年1月。場所は、今の尼崎市、当時は川辺郡尼崎町初島というところに作られました。資本金は50万円です。当時の神戸新聞の切り抜きを見ますと、設立委員会が開催されたという記事ですが、呉錦堂を筆頭株主に、麦少彭さんとか、財界人としては、兼松房二郎、瀧川辨三、川西清兵衛、こういう方々が出資されています。

明治時代の日本工業要鑑という産業のデータベースが神戸大学の図書館にあるのですが、これを見ますと、明治41年8月現在、セメント会社は全国で15社が操業していました。小野田セメント、中央セメント。浅野セメントは資本金500万円、東亜セメントの10倍です。もともとは官営セメントの払い下げとかあって、古い歴史を持っている会社です。こういった錚々たるセメント会社のほかに、明治40年1月に2社、しかも、いずれも関西圏で創業しています。東亜セメントと木津川セメントです。

ここで、一つ覚えておいてほしいのですが、呉錦堂を筆頭株主として、兼松房二郎、瀧川辨三、川西清兵衛とあるんですが、この段階では東亜セメントの株主リストに武藤山治の名はありません。（ここで、地図上、東亜セメントの位置を確認。）

では、なぜ、呉錦堂がセメント事業に乗りだしたか。まず、社会背景から見ていきます。明治40（1907）年頃の九州、ちょっと九州をイメージしていただきたいのですが、例えば、八幡製鉄所が大規模な拡張を行います。それから、田川炭鉱、三池炭鉱など三井系の炭鉱がどんどんでき、九州中心に重工業が発達していきます。このことに関連し、次の表を見てください。当時のセメント需要ですが、浅野、小野田など大規模なセメント工場が稼働していたにもかかわらず、輸入量が激増（明治40年が特に顕著）、国内生産能力を遙かに

明治後期のセメント輸入量

年次	数量 t	金額 円	
明治30年	1897	56,665	827,209
明治31年	1898	19,957	273,821
明治32年	1899	2,991	79,256
明治33年	1900	3,689	120,945
明治34年	1901	1,879	63,831
明治35年	1902	803	28,661
明治36年	1903	1,583	40,749
明治37年	1904	431	11,901
明治38年	1905	721	22,695
明治39年	1906	428	9,905
明治40年	1907	45,406	1,337,253
明治41年	1908	16,508	427,070
明治42年	1909	800	21,491
明治43年	1910	28	742
明治44年	1911	541	12,933
大正元年	1912	1,094	35,062

超える需要が見込めるという社会背景があった。で、こういうセメント需要の緊迫を呉錦堂は知り得たのではないのでしょうか。

この辺の事情を、中村哲夫先生は、「日露戦争時のセメント輸送の経験から、その重要性を察知していた」と、また、山口政子先生は「明治 39 (1906) 年、中国の白羊湖の水害でダム建設にセメントの必要性を感じた」とおっしゃっています。私なりに考えると、中村先生の説から、呉錦堂が、三井財閥や九州の炭鉱と関係が深く、前述のような社会背景を知り得る立場にあった。山口先生の説から、呉錦堂は、漢冶萍公司にかかわる立場にあって、中国での重化学工業の新興、治水等の土木事業における需要を想定し、セメントってこれから大事だなあと、需要の伸びを確信するに至った。これらのことから、「セメントは将来、儲かるぞ!」ということが呉錦堂の頭にあったと思えます。

ところが、世の中、うまくいかないものですねえ。需要が急速に落ち込みます。全国のセメント業界が同時に大不況に陥ります。東亜セメントも、創業からいきなり売れません。3期目（操業1年半後）から生産調整に追い込まれます。全然儲からない。累積赤字が重なってきます。こういう状況で、呉錦堂は次の手を打ちます。

創業から一年半後、明治 41 年 7 月に田岡典章、この田岡典章が実はキーパーソンですが、田岡を専務に迎えます。専務に迎えるどころか、いきなり、株式を 20%取得しているのです。呉錦堂でさえ 22%です。事実上、共同経営者に近い破格の待遇で迎えたのです。

呉錦堂の東亜セメントは産地直結型ではなく消費地隣接型の工場だと思っていただければいいかと思います。セメントの主材料は石灰岩と粘土で、産地は近くにありません。外部から船舶で持ってきて、ここで加工して消費地に持っていく。当時のセメントの輸送というのは、今のようには 20kg の袋ではなく、120kg の樽につめて輸送していました。今と違って鉄道網、自動車網が発達していませんでしたので、消費地に近い方が有利であるという考え方があったと思いますね。

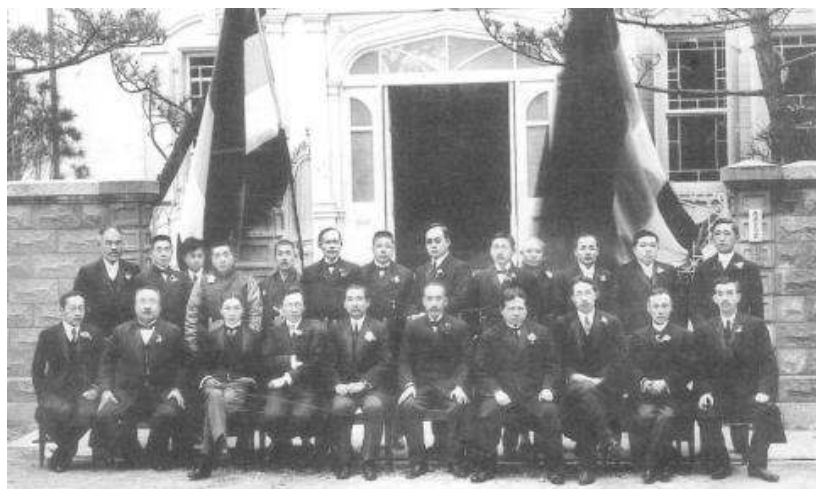
一方、明治 43 年、呉錦堂が開墾事業の認可を取った年ですが、今の神戸市西区の神出小東野に、あまり記録がないんですが、神出小学校の古い記録に、呉錦堂さんが製材所 2カ所を作っていたと出てきます。なんで神出小東野なのか、それは、松材でセメント樽を作りますが、小東野の松で樽加工をしていたのですね。これで、東亜セメントと小東野という二つの点が線で結ばれますよね。小東野も関係があったのです。

#### 《松海別荘、続いて移情閣の建築》

で、もう一つ、これが今日の本筋なんですが、昭和 44 年 2 月、東亜セメントに隣接して、すぐ北側に、「田岡式セメント石合資会社」を設立しました。3月8日の新聞ですが、登記記事が載っています。この記事に出資者が出ております。呉錦堂 5 万円、武藤山治 1 万円、田岡典章 1 万円ということで……。この 3 人が出資して、田岡が事実上、責任者になって、会社を設立しているんですね。武藤山治が突然出てくるんです。なぜここで武藤山治がかかわるのか、田岡とどのようなつながりがあるのか、全くわかりませんでした。また、田岡典章って何者？どんな履歴を持つ人か？謎の人物でした。

田岡は、専務取締役就任のわずか 1 ヶ月後に東亜セメントの特許所有権という形で「田岡式セメント石製造機」の特許を申請しています。明治 41 年 11 月、特許が下りています。

それで次に何をしたか。松海別荘を建てました。有名な記念写真の後ろの建物ですね。明治44年の竣工です。なんで明治44年竣工と言うかといいますと、実は、明治44年の東亜セメント



「第10期営業報告書」、これは神戸大学に原本がありますが、この営業報告書によりますと、自邸住所を舞子2028番地、移築前の移情閣があったところに移しているのです。今までは、確か栄町だったと思います。移した上に、ここで、これまで尼崎で開いていた株主会、営業報告会を開いてい

るんですね。「田岡式セメント石製造機」の特許取得が明治41年、「田岡式セメント石合資会社」の設立が明治44年、という流れとぴたっと合ってきます。どう考えても、この明治44年が松海別荘を建てた時と考えるのが妥当と思います。

これは、実際、すごいことで、これまで、わが国最古のコンクリート・ブロック造は、大正11年竣工の東京日比谷の愛国生命保険会社社屋といわれています。これは河合浩蔵の設計です。河合浩蔵という方は神戸地方裁判所庁舎のレンガ造の建物を設計した人です。学会のデータでは、これがコンクリート・ブロック造の本格的建築のスタートといわれていますが、松海別荘はこれより早く完成してるじゃないですか。学会諸説を覆す早い段階で、呉錦堂さんは田岡と組んで、日本で一番最初に本格的なコンクリート・ブロック造の建物を作っていた可能性が高いのです。



では、松海別荘をどんな目的で建てたかかという、セメント石製造機の特許を取って、セメント石製造の会社を作った、製造だけでなく販売も施工もやりますということで、ブロックでどこまでできるか実例を示す「モデルハウス」だと考えて間違いないと思います。

いま、皆さんがいます付属棟は、当時の典型的な洋館の工法であった木骨煉瓦造、レンガによる組積造の建物です。新しくできた松海別荘の本館は、木骨コンクリート・ブロック造、コンクリート・ブロックによる組積造の建物です。一方は一般的なレンガ造、一方は新技術によるブロック造、新旧二種類の組積造を実物の建物を並べ比較できたんです。呉錦堂さん、やるなと感心しました。

移情閣を移築する際に、もとの松海別荘の下のところから、構造材としてのブロックと共に内装材も出てきました。移情閣に展示されていますが、コバルト顔料を使った床用の化粧ブロックです。この化粧ブロックは二種類あります。松海別荘の床面はこういうコンクリート製の平板ブロックが用いられた可能性が高いと思います。もう一つ、これも有名な孫文歓迎時の写真ですが、このブロックですよね。最初石と思ったのですが、よくよく見るとブロックなんですね。即ち、呉錦堂さんは、建築の構造から、内装、外構にいたるセメントによる総合資材の開発をめざして

いたのですね、それも明治時代にですよ。

そして、呉錦堂さんと田岡さんは、まだ歩みを止めません。いよいよ移情閣の建設にとりかかります。先ほど言いましたように、付属棟があって、その横に松海別荘の本館を作りました。本館は、大きさが移情閣の3倍くらいあるんですが、本館の南東のベイウインドウに隣接した形で移情閣を増築しています。

松海別荘の南東面の壁を共有する形で移情閣を増築しました。移情閣の解体の時に、内装材をめくってみたら、違う建物の外壁が、彩色した緑色の壁が出てきたんです。(モニターを見ながら) ここ、円形アーチの窓飾りの部分がちょっと見えて、ブロックが乱雑な段積みになっていますよね。ここが松海別荘本館と移情閣を結ぶ出入り口だった。この出入り口は、昭和3年、松海別荘が国道の拡幅にともなって解体された時に塞いだ跡なんですね。この赤いところが、今でも、松海別荘のブロックとして、現存する日本最古のものが残されている所です。この箇所が現れてわかったのですね、移情閣の色って緑だったと。(外気にあたっている所は) わずか数年で、みんな風化(変色)してしまうのですが、ここだけは、封印されたような状態になって、元の色が残ったのですね。



さて、移情閣なんですけども、松海別荘と比べて、何がどう変わったかという、より複雑になっています。外壁は5018個のブロックからできています。ところで、窓飾りは、1階は欠円アーチ、2階は水平マグサに複弁飾、3階には尖塔アーチと、わざわざ、デザインを全部変えています。コーナーについても、少し大きさを変えて、くの字ブロックを組み合わせている。そして、それらをすべて、プレキャストブロック、つまり、型枠を作って、ブロックを製造して、持ってきて組み合わせている。大体、平ブロックが75%で、化粧ブロックが25%くらいですが、非常に手の込んだ意匠のブロック造の建物を建てました。



移情閣で、当時の技術で、プレキャストのブロックを作ることを思うと、絶対、石造と変わらないほど、お金がかかっていると思います。建築規模が非常に小さい上に、なお且つ、いっぱい型枠が要りますので大変だったと思うんです。これをぐっと横に広げて、大規模な建物を想像してみてください。パターン化して、このパターンを繰り返し続けるとしたら、型枠はすべて償却されますので、大きな建物であればあるほどコストダウンが可能です。

当時、ライバルがいました。小野田にあるんですよ、一つ。小野田セメントの山手クラブといいます。国の登録文化財です。移情閣は重要文化財ですから、移情閣の方が格は上です。(笑) 小野田の山手クラブの方は、国産ではないんですね、技術が。イギリス製の型枠を小野田の方が持ってきて、人造石を作って、モデルハウスとして建てた。こっちは国産ですね。これ以上のものが松海別荘でできていて、移情閣はもっと複雑なもの、意匠的にかなり複雑なものできてい

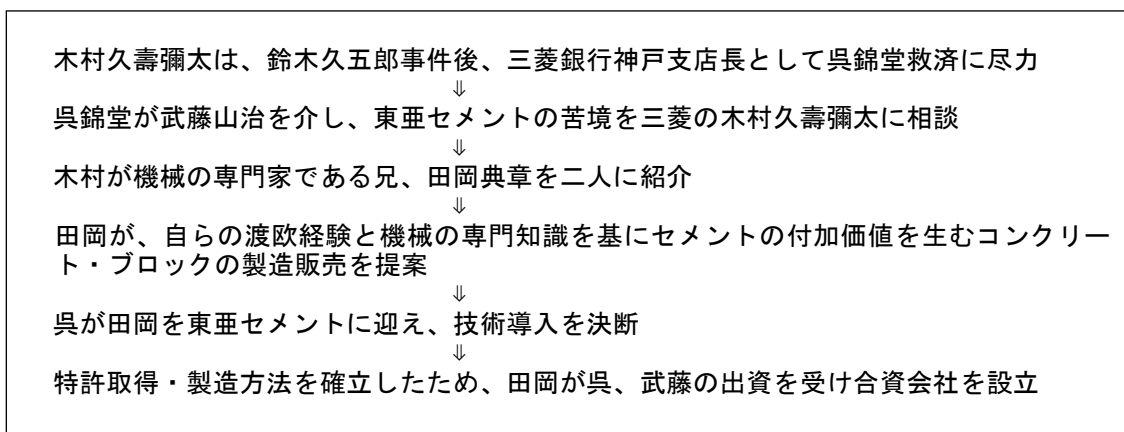
た。小野田に対抗できるだけの技術は十二分にあった。これ以上の技術をすでに確立していた。すなわち、田岡さんは、究極の人造石を作ろう、それを松海別荘からより進化させ、移情閣と併せてデモンストレーションしようとした構図が見えてきます。



(中略) 木骨コンクリート・ブロック造という工法は、組積造なので耐震性は悪いです。このままではダメなんです。だから、移築復原時、ブロックと木の構造材(木骨)との間にステンレスプレートを入れて、これとブロックを、1㎡に1個ぐらいずつは留めていくという形で構造補強をしています。

■この後、塚原氏の田岡典章を探る興味深い話が続きますが、この講演録はここまでとさせていただきます。田岡典章にかかわる部分、ならびに全体のまとめについては、氏作成のレジメの記述に譲ります。

#### 田岡典章って何者？人物像を紐解く



#### コンクリート・ブロックに賭けた夢 まとめ

- ◇東亜セメントコンクリート・ブロックは在来工法で施工可能な人造石の範疇にあって、高付加価値を目指した。(事実、英国技術による同時期の小野田クラブに比べ意匠に富む)
- ◇移情閣創建の頃、建築家を中心に耐震性、施工性を追求した、人造石とは一線を画すコンクリート・ブロックが誕生した。
- ◇世の潮流は、耐震性能重視に向かい、組積造材である移情閣型コンクリート・ブロックは主流とならなかった。
- ◇大正 12 (1923) 年の関東大震災により、RC造が本流となり、組積造は駆逐され、移情閣型コンクリート・ブロックの役割は完全に終焉した。
- ◇大正 5 年の田岡急逝により、新たな技術開発がストップした。  
—在来工法へのこだわりで建築家でない田岡の限界が見えたように思える—
- ↓
- ◇結果的に移情閣は、コンクリート・ブロックの誕生から、組積工法の衰退するまで(明治 40 年代～大正初期)のわずか 10 数年間のみに成立しえた建築史上、貴重な事例となった。

文責：移情閣 (孫文記念館) 友の会 橘 雄三